## レバノンとパレスチナ、

# すっかり忘れられているレバノンやパレスチナの最近の状況について、駐在員や現地職員たちに

最近の状況について、駐在員や現地職員たちに聞きました。



シャティーラキャンプ



#### ◆レバノンでは新しい学年が始まりました

今年も子どもたちが幼稚園や学習支援ク ラスに入ってきましたが、資金難でこれま でよりも小規模な支援になっているのが 残念です。児童精神科や心理サポート事 業も継続しています。3年以上続く絶望的 な状況で、メンタルヘルスの支援はますま すニーズが高まっています。(写真はシャテ ィーラの子どもの家センター前で)

### ◆人々は「ゾンビ」のよう——**シリア**

最近シリアに里帰りしていた国連職員に シリア国内の状況を聞きました。

「シリアでは現在、政権の支配している地 域、トルコなどが支援する反政府軍の地 域、ロシアが実質支配している地域と米 軍が実質支配している地域に分かれてい て、膠着状態、冷戦状況です。しかし、経 済も社会も崩壊していて、タクシーに乗っ たら窓ガラスも天井もないような代物で した。

そんな中で、先行きが全く見えず、人々は 『死んでいないけれど生きているとも言 えない様子』です。家族は引き裂かれ、多 くの人が喜びや笑いのない毎日を過ごし

## レバノン

### 絶望からの脱出に賭けて

電気のない生活に慣れてきました。 公共の電力は1日に1-2時間しかな いのですが、それが当たり前になりま した。ベイルートの街中でも外灯がほ とんどついていないため、足元を携 帯電話のライトで照らし、夜外出しな いとならないときは、ひったくり等も 心配で配車アプリでタクシーを呼び ます。停電中はアパートにある自家発 電機の電気を買い蓄電池などで対応 していますが、太陽パネルはまだ富 裕層だけです。自家発電機への支払 いも燃料価格の高騰で大変なことに なっています。知り合いは2年前に月 80ドルだった電気代が500ドルにな ったといいます。

日本でも報道されたように、銀行 口座から預金を引き出せなくなってい る人たちが、自分のお金を暴力的に 取り出そうとする事件も後を絶ちませ ん。19年秋の経済危機以前、レバノ ンの銀行は高金利を売り物にしてい たため、多くの人が海外への出稼ぎ で得たお金などを預金していたので すが、こうした口座はすべて凍結さ れてしまい、19年秋以降新たに開け た口座しか使えなくなっているのです。 銀行でのトラブルは日常茶飯事にな っていて、ニュースにもならなくなりま した。19年の秋以降、状況は悪化す るだけです。街角の物乞いの人たち の数も非常に増えました。

レバノンでは若い人たちはみな、海 外に出ていくことを考えています。ヨ ーロッパや北米、オーストラリアなど で国籍を取って家族を呼び寄せる目 的です。しかし、レバノン国籍者は観 光目的でも、ヨーロッパや北米、湾岸 産油国へはビザが必要で、なおかつ レバノンに戻る保証として、就労証明 書や預金残高証明書も必要で、提出 しても最近はなかなかおりません。ま して、パレスチナ人やシリア人の場合 ビザ取得はほぼ不可能です。そのた め、危険を承知で不法出国を図る人 たちが一向に減りません。前のペー ジで紹介したヌールとアフマドの兄弟 は、それぞれラッパーやダプケ(民族 舞踊)のダンサーでしたが、それで は家族を養えず、海外に可能性を求 めたわけです。不法出国に際しては1 人当たり5,000ドルから6,000ドルが 必要で、二人はありとあらゆる知り合 いから少しずつお金を借りていたとい うことですが、息子たちを亡くした家 族は、この借金も背負うことになりま した。

こうした状況で、シリア人やパレス チナ人への差別や迫害が急激に増え ました。テント生活者でなく家賃を払 って住居を借りている人たちも、家主 から急激な値上げを要求され、立ち 退きを迫られているのです。また、滞 在許可が取れなくなり、公立学校に 通えなくなった子どもも増えています。 しかも今月になって、レバノン政府は 毎月1,000人をシリアへ強制送還す

ると発表したため、人々に動揺が走り、心理状態にも大きな影響がでています。また最近はコロナだけでなくコレラの流行も報じられています。パレスチナ人やシリア人は生き延びるために必死の中で、厳しい冬を前にしています。パレスチナ子どものキャンペーンでは、この冬も越冬支援を実施します。ぜひご協力をお願いいたします。

## パレスチナ

### 圧迫と衝突が続く

昨年5月と今年8月のイスラエル軍によるガザ空爆と破壊は記憶に新しいところですが、ほとんど知られていないのが、ヨルダン川西岸と東エルサレムでの軍とパレスチナ人の間の衝突です。国連によれば、2022年1月から9月までの間で、ヨルダン川西岸と東エルサレムだけで、105人のパレスチナ人が亡くなりました。また3月以降、イスラエル側でも17人が亡くなっています。パレスチナ人の犠牲者のうち多くが巻き添えになった民間人で、また約半数が18歳以下の子どもと未成年者、78歳の高齢者も含まれています。

夏以降、毎日ヨルダン川西岸の各地で衝突が起こっている他、東エルサレムではシュファット難民キャンプが軍に包囲され、住民が通学や通勤、通院さえできない状況も続いています。最近ではハマスやイスラム聖戦派などのこれまでの武装組織でなく、新しい小さな武装グループが生まれているという情報もあり、今後、軍事的な衝突が増え、犠牲者が増えることが心配されています。

ユダヤ人入植者による攻撃も先鋭化し、エルサレム旧市街のアルアクサモスク境内やヘブロンのイブラヒムモスクでの入植者団体による狼藉も火に油を注いでいます。そして、西岸と東エルサレムの多くの地域で入植地の建設と拡大が進み、入植地の建設中止を求めた国連安保理決議2334号(2016年12月)は完全に無視されています。9月の国連総会で、イスラエルのラピド首相は「二国家解決」



ベツレヘム

に言及したものの、パレスチナ自治政府との関係は途絶えたままで、11月にあるイスラエル総選挙を目前にして、ますます右派や入植者寄りの強硬な政策が進むことが心配されています。ウクライナの状況と安易な比較はできませんが、占領、入植地や併合などに関して、国際社会はダブルスタンダードを取ってはいけないと再確認する必要があります。

8月のガザへの空爆は3日間という 限定的なものだったとはいえ、49人 が犠牲となり、約100家族が家を失 いました。またインフラも破壊された ため、ガザでは一日12時間まで戻っ ていた電気の供給が再び6時間ほど になりました。ガザの街では、大きな スーパーなどは営業をしていて物資も 豊富にありますが、小さな商店や食 堂が店を閉じ、貧しい人が増えてい るのを感じます。いままでは、隣近所 や親せきがお互いに融通するなど助 け合いながらなんとか暮らしていまし たが、いつどうなるか分からないとい う不安の中で、互いを思いやる余裕が なくなり、人付き合いが変わっている と感じます。他方、イスラエルの人手 不足から、ガザや西岸からパレスチ ナ人の出稼ぎ労働者が増えていると いう新しい状況も生まれています。こ れがガザの窮乏状態を解決する一助 になるのかどうかはまだ分かりません が、パレスチナ人の求めているのは経 済だけではありません。彼らの求める 独立や人権が置き去りにされないよ う、私たちも注視していかないとなり ません。



◆障がい者と家族の支援を続けています 8月の空爆で新たな障がい者も生まれ、 介助する家族の負担も増えています。本 人への治療やリハビリ、心理的なサポート、 補助装具提供などに加えて、家族支援に も重点を置いています。家族どうしの「ピ アサポート」は大変有効で、家族でないと わからない様々な問題を相互に支えなが ら、前向きに取り組む姿には勇気を貰え ます

(写真は家族サポートの参加者)



◆小学校での理科教育支援も続いています 今年度は、西岸南部のヘブロンを中心と した地域とガザ北部で、理科室の修繕や 実験器具の提供、教員研修などを続けて います。自治政府の官僚主義の壁にもぶ つかりながら、子どもも教員も楽しく理科 実験に取り組めることを目指しています。 (写真は小学生用の実験の説明書)